

2022 年春

マラヤ大学オンライン研修体験レポート

English Language Course



目次

a. プログラムの概要	3
a-1. マラヤ大学の紹介	3
a-2. プログラムの概要	4
期間	4
参加者の出身大学	4
参加学生数	4
使用したソフトウェア	4
主なスケジュール	4
a-3. 各授業や活動の概要	6
授業ごとの内容	6
アクティビティの内容	7
b. プログラムのハイライト	10
己の才能を自由に披露する TALENT SHOW（経済学部 3 年 東雅貴）	10
Malaysian Study の授業で得た多様な文化への理解（経済学部 1 年 大須賀嘉美）	11
Funny Debate（経済学部 1 年 岸田麻巳子）	11
マレーシアの多文化共生社会（文学部 1 年 櫻井彬乃）	12
バディとのディスカッション（農学部 1 年 佐倉田綺羅）	13
映画鑑賞（工学部 2 年 高藤実結）	14
Traditional Fashion Show での異文化交流体験（工学部 1 年 本田理紗）	14
c. 研修体験・成果	16
マラヤ大学オンライン留学で成長した力（経済学部 3 年 東雅貴）	16
プログラムで学んだ 3 つの力（経済学部 1 年 大須賀嘉美）	17
3 週間の学びの成果（経済学部 1 年 岸田麻巳子）	18
プログラムを通して得た成果（文学部 1 年 櫻井彬乃）	20
英語学習の意義と向き合い方（農学部 1 年 佐倉田綺羅）	21
研修による意識の変化（工学部 2 年 高藤実結）	23
三週間の学びと実践（工学部 1 年 本田理紗）	24

a. プログラムの概要

a-1. マラヤ大学の紹介

マラヤ大学は、首都クアラルンプール南西に位置する、マレーシア最古の大学である。マレーシア最高峰の大学として知られており、マハティール元首相をはじめとする同国の政治家や各界の著名人を多数輩出している。QS アジア大学ランキング 2022 では 8 位、QS 世界大学ランキング 2022 では 65 位にランクインし、世界的な評価を高めている。

373 ヘクタールの広大なキャンパスには、講堂や図書館、留学生寮やスポーツ施設が充実しており、学内の移動にはシャトルバスが運行している。クアラルンプール中心部からのアクセスが良い一方でキャンパス内には植物園や池があり、都市と自然の調和のとれたキャンパスが特徴的である。また、理学・工学・法学・経済学・文学・社会学等、様々な専攻を選ぶことができる総合大学である。

マレーシアにはマレー系、中華系、インド系、と多様な民族が共生しており、マレー語、中国語、タミル語が話されているのはもちろん、教育や社会の共通言語として英語が広く普及している。人々が信仰する宗教もイスラム教、仏教、ヒンドゥー教、キリスト教など多岐に渡る。このような多文化の特徴は大学にも反映されており、例えば、キャンパス内に多数あるカフェテリアではバラエティ豊かなメニューが提供されている。

このように、マラヤ大学は民族や宗教の壁を越えて高い志を持った人々が切磋琢磨しながら学ぶ場が整っている。

a-2. プログラムの概要

期間

2022 年 2 月 14 日（月）～3 月 4 日（金）の 3 週間

※2 月 11 日（金）オリエンテーション

参加者の出身大学

UNIVERSITY OF MALAYA

東北大学

岡山大学

関西学院大学

参加学生数

日本人学生 東北大学 7 人

岡山大学、関西学院大学 12 人

マレーシア人学生（バディ）10 人

日本人学生 2 人に対し 1 人のマレーシア人学生がバディとしてつき、授業の課題やアクティビティをともに行う。授業時間外にも LINE 等で連絡を取り、課題の確認や交流をすることができる。

使用したソフトウェア

Kahoot!

StrawPoll

Zoom

LINE

Instagram

主なスケジュール

授業は平日のみで、1 時限目が日本時間で 9:00-11:30、1 時間の休憩を挟んで、2 時限目が 12:30-14:30 である。授業によっては、途中で休憩時間が設けられるものもある。時間割は表 1 に示す通りである。Malaysian Studies、Speaking and Pronunciation、Grammar Usage、Reading and Vocabulary、Writing and Composition の 5 科目が週に 2 回ずつ開講される。授業専用の LINE グループが作られる科目もあり、授業資料や課題が共有される。

アクティビティは、基本的に月・水・金曜日の授業後、1 時間程度の休憩を挟んだ後に 2 時間程度開催される。これらはマラヤ大学の学生が企画するもので、マラヤ大学が同じ期間に開催する留学プログラム SoShip と合同で開催されることもある。

以上の活動が無い時間は、各自のバディと日程を調整して zoom 等でミーティングを開き、バディと共同で行う課題に取り組むことが求められる。また、LINE 等 SNS を通してバディと連絡を取り、授業や課題の相談をしたり、趣味の話や大学の話、お互いの文化の紹介をしたりして交流することができる。

表 1：プログラムの時間割(日本時間)

	MON	TUE	WED	THU	FRI
09:30-	Malaysian Studies	Grammar Usage	Reading and Vocabulary	Speaking and Pronunciation	Writing and Composition
11:30-	Break				
12:30-	Speaking and Pronunciation	Reading and Vocabulary	Writing and Composition	Grammar Usage	Malaysian Studies
14:30-	Break				
	Activity		Activity		Activity

a-3. 各授業や活動の概要

授業ごとの内容

・ Malaysian Studies

講師：Ms. Sofiya

この授業では、マレーシアの歴史や文化について詳しく知ることができる。初回はマレーシアについての基本情報と歴史に加えて挨拶の仕方やマナーを学ぶことができる。第2回では宗教と民族、祭りについて、第3回では結婚の文化について学ぶことができる。さらに第4回では伝統的な衣服と工芸、芸術について、第5回では観光地について学ぶことができる。最終回は資料持ち込み可のテストが実施される。

・ Grammar Usage

講師：Mr. Hashim

この授業では、12 時制の定義と用法について学んだ。練習問題をグループのメンバーと共同で解いたり、口頭で一人一人問題に答えたりすることで各場面における適切な時制とその根拠を学ぶことができた。授業時間外にもグループで取り組む課題と個人で取り組む課題が出された。最終回の授業後には扱った内容の理解度を確認するテストが実施された。

・ Writing and Composition

講師：Mr. Shaiful

ライティングの授業では論理的な英作文の方法を学んだ。自分の主張をパラグラフごとに役割を持たせて論理的に書く練習をした。また図や表から読み取れることを英作文にする課題にも取り組んだ。授業の中では、生徒が事前に書いた作文を添削しながら進んでいくため非常に実践的であった。どのパラグラフに何を書けばいいのか、パラグラフをどのように組み立てればいいのか分かり、非常に学ぶことが多かった。

・ Speaking and Pronunciation

講師：Ms. Amira

この授業では、毎回最初にその日扱う話題の共有やそれに関する英語表現の紹介を行い、その後各 5 人程度のグループに分かれ、出された課題に沿ってディスカッションを行い最後に全体で共有を行った。第5回、第6回では簡単で面白い内容を扱ったディベートを行い、楽しみながら英語をその場で考えて話す力を鍛えることができた。授業時間外の課題は、バディーとディスカッションをするものが多く、その様子を録画して提出した。

・ Reading and Vocabulary

講師：Ms. Nhakimah

リーディングの授業では意味が似ている語彙や、普段あまり使わない語彙について学んだ。さらに短い文章を読み、文章の内容についての確認テストも行った。語彙に関する授業では、類義語や対義語を中心に学んだ。他にもそれと関連した意味の単語を多く学習した。日頃、単語帳などで単語を覚えることはあっても類義語や対義語はあまり意識していなかったもので授業を受けて単語同士の関係にも意識を向けるようになった。

アクティビティの内容

・ 授業外アクティビティの概要

平日のうち月・水・金曜の3日間に関しては、授業外のアクティビティが行われる。よって、授業自体は14:30で終わるものの、実際には18:00頃までイベントがある日が多い。内容としては、ジェスチャーゲームやクイズ大会などのレクリエーション的なものから、現地の食べ物や民族衣装を実際に見せてもらう企画や、自身の才能ある特技を披露する大会などといったものまで、様々なアクティビティが用意されている。どれも堅苦しくはなく、楽しみながら参加できる企画である。また、クラス全体でのイベントの他にも、自分のバディとお喋りしたり、何人かで集まって人狼ゲームが行われたりもした。これらの活動内容はバディによって異なる。バディが個人的に企画するイベントは、土日で開催されることもあるので、週末の予定は前もって伝えておくことが望ましい。

・ Movie Day

貧しいながらも何よりも大切な5歳の息子のために、懸命にセールスマンとして働く父親の姿をえがいた「The Pursuit of Happiness」では、映画を見終えた後に「幸せ」に対する価値観がどのように変化したのかについて、マラヤ大学のバディの学生とzoomで議論をした。また、「Suatu Ketika(Once upon a time)」というマレーシア映画では、マレーシアの弱小サッカーチームが、イギリスの優勝チームに対して果敢に挑戦する様子が描かれていた。マレーシア映画は見る機会が少ないため、大変貴重な経験となった。

・ Virtual City Tour

授業外のアクティビティの時間に日本人学生とマラヤ大学の学生が、それぞれ自分達の住んでいる街について紹介し合った。日本人学生の多くは仙台や岡山、関西に住んでいたため、それらの地域をスライドショーでマラヤ大学の学生に紹介した。マラヤ大学の学生は、

キャンパスがある州について紹介してくれた。その中では、おすすめのスポットやお店を、映像を交えながら紹介してくれたため、いろいろと知ることができ面白かった。

・ University of Malaya Campus Tour

マラヤ大学の建物や、寮の様子を画像や映像を交えて紹介してくれた。また、彼らがどのように普段生活し、勉強しているのかについて、質問にも大変丁寧に答えてくれた。将来マラヤ大学へ交換留学や正規留学を考えている生徒には特に有用な情報となったであろう。アクティビティの最後には、「Kahoot!」というサイトを用いて、マラヤ大学のキャンパスに関するクイズ大会が開催され、盛り上がった。

・ Game

アクティビティでは他にも werewolf(人狼)や Charedas(ジェスチャーゲーム)、カウンティング、ブラインドゲームなどをマラヤの学生と一緒にいった。werewolf は日本とほとんど同じルールで遊んだ。zoom やチャットを活用して話し合い、オンラインであったがバディたちと楽しい時間を過ごした。Charedas はジェスチャーゲームに近い遊びで、与えられたお題の単語をジェスチャーのみで伝えて当てるといったものだった。日常的な単語以外にも洋楽のタイトルや人物名などもお題となり、伝えるのが難しいが当てることができるとうれしかった。カウンティングというゲームは 1~10 までの数字を誰とも被ることなく言い合うゲームだった。お互いのタイミングを見計らいながら言うのは意外と難しく、何度も挑戦した。

・ Fashion show / Food Mania

このアクティビティでは日本の学生とマレーシアの学生がそれぞれ自国の食べ物を持ち寄って紹介したり、伝統衣装を写真や動画の共有や、実際に纏って参加しその着方を実演することで紹介したりした。マレーシアの文化を知るだけでなく、日本の文化を再発見することができる。

・ Got Talent Show

タレントショーでは、自分の持っている特技や才能を自由に皆の前で披露するイベントとなっている。また、イベントの後には、最も素晴らしい才能を持った人を投票により決定するという楽しいイベントであった。参加者の中には、楽器を生演奏する人や、過去に大会で演奏した映像を共有する人がいた。さらには、スポーツに取り組んでいる様子や、絵画の作品集を共有する人もいた。特に笑いを生んだ生徒は、カラオケにわざわざ足を運び、熱烈に歌唱するといった特技であった。大変有意義な時間を過ごすことができた。

・ Closing Ceremony

Closing Ceremony では、それぞれの授業を担当した講師の先生の方々からお言葉をいただき、放課後のアクティビティで行われたタレントショーの優勝者の発表も行われた。優勝者はギターでスピッツの曲の弾き語りをした女性の日本人学生であった。また、プログラムを振り返ったムービーを見た後にプログラムを終えての感想やお別れの言葉をひとりひとり述べ、現地の学生たちとの最後の時間を過ごした。

b. プログラムのハイライト

ここでは、参加者それぞれがプログラムの中で最も印象に残っていることについて述べる。

己の才能を自由に披露する TALENT SHOW

経済学部 3 年 東雅貴

このプログラムでは、授業後にマラヤ大学の現地バディの学生達が準備した多種多様なアクティビティがある。その中で最も印象に残った企画が「TALENT SHOW」だ。この企画は、マラヤ大学が設けている SEP (Summer Enrichment Programme : 私達の参加しているこのプログラム) と SoSHIP (Social Science and Humanities Immersion Programme : 人文社会科学系科目履修のオンライン留学プログラム) の二つのプログラムに参加している学生の全員が参加可能な大型イベントであった。企画タイトルにある通り、自分の持っている特技や才能を自由に皆の前で披露するイベントとなっていて、イベント後に最も素晴らしい才能を持った人を投票により決めるという楽しいイベントであった。参加者の中には、バイオリンやギター、ピアノ、ファゴットの生演奏をする人や、過去に大会で演奏した映像を共有する人がいた。さらには、野球や弓道などのスポーツに取り組んでいる様子や、絵画の作品集を共有する人もいた。マラヤ大学のバディの女性が披露した絵画集の中には、日本の街中の様子を色鮮やかに描いた絵もあり大変感動した。他にも裁縫で自作したマフラーを披露する生徒や、中にはカラオケにわざわざ足を運び、熱烈に歌唱する面白い生徒もいて、大変有意義な時間を過ごすことができた。私は、お気に入りのアーティストである尾崎豊のシェリーを歌った。マラヤ大学のバディの学生の反応がよく、大変気持ちがよかった。

英語学習や異文化理解の近道の一つは、面白い企画を一緒に作り上げ、笑い合い、交流することだと感じる事ができる素晴らしい体験となった。

Malaysian Study の授業で得た多様な文化への理解

経済学部 1 年 大須賀嘉美

このプログラムの中で私が最も印象に残っている授業は、マレーシアについて学ぶ Malaysian Study の授業である。このプログラムに参加する前まで、私はマレーシアについてほとんど知らなかった。どのような民族がおり、どのような文化が存在しているのか知らなかった。しかし、Malaysian Study の授業を受けて、マレーシアについていろいろなことを知ることができ、異文化をより理解し尊重できるようになりたいと思った。

マレーシアはマレー系、中華系、インド系の主に 3 つの民族で構成されており、他にも多くの少数民族がいる。それぞれの民族は独自の文化を持っている。そして、それぞれの文化が共存し混ざりあっているのが興味深かった。例えば、宗教関連の祭典に関しても様々なものがある。イスラム教では断食の期間であるラマダン明けに大きな祭りがある。また、聖地メッカへの巡礼に伴ったお祭りも行われる。中華系の人々は、旧暦の正月にあたる春節を盛大に祝う。一方で、ヒンドゥー教では家の中をキャンドルなどで装飾する Deepavali という催し物が行われる。さらに、クリスマスも宗教に関係なく祝われており、マレーシアでは家族と一緒に過ごす人が多いらしい。このようにそれぞれの宗教に関係した多くの祭典が存在するが、自身の宗教に関わらずそれぞれの祭りを楽しんでいると言っていた。例えば、イスラム教の人でも旧正月を楽しんだりする。

この授業を通して、マレーシアには多様な文化があると知ることができたと同時に、マレーシアの人々はそれぞれの文化を理解し、尊重しているのだと知れた。この授業を受けて私も様々な文化を尊重する姿勢を身に付けていきたいと思った。

Funny Debate

経済学部 1 年 岸田麻巳子

Speaking and Pronunciation の 5 回目の授業で Funny Debate を行った。Funny Debate では、賛成・反対のチームに分かれ、その名の通り「Funny」なトピックについて議論を展開し、ジャッジが勝敗を決める。私のグループでは日本人バディが二人ずつ賛成・反対に分かれ、「スマートフォンは学生を愚かにするか」について議論し、現地バディ 2 人がジャッジ

を務めた。賛成チームの私は、スマートフォンは依存性が高く、誘惑が多いため学生が自制するのは困難だと主張したが、反対チームは情報へのアクセスの良さやスマートフォンを用いた勉強の利点を主張した。主張の後は互いに質問、反論をぶつけ合い、とても白熱した議論となった。5回目の授業でグループディスカッションに慣れてきたからか、日本人学生皆が積極的に主張をし、少しの隙を見せるとすぐに反論されてしまう。おそらく文法はめっちゃくちゃだっただろうが、とにかく必死で自分の意見を言った。

私にとっては初めての経験だったが、調べてみるとこの Funny Debate はよく知られた英語学習法であるようだ。批判的、論理的、個性的な考え方、即座に話す力、説得力のある話し方が必要であるからだ。これらの力が文法や読解力同様に英語力において重要な要素であることを考えると、Funny Debate が効果的な学習法だとわかる。

残念ながら賛成チームは負けてしまったが、終わった後は達成感と充実感があつた。これからも、オンライン英会話を受講する際に挑戦してみたい。

マレーシアの多文化共生社会

文学部 1 年 櫻井彬乃

私のこのプログラムのハイライトは、マレーシアの文化の多様性と共生を体感したことである。週に 2 回行われる Malaysian Studies の授業では、たくさんの写真や映像を見ながらマレーシアの民族や宗教をはじめとした様々な物事について学ぶことが出来た。マレーシアは主にマレー系、中国系、インド系の人々と少数民族で構成されており、宗教もイスラム教、ヒンドゥー教、仏教など様々である。私はそれまで日本で過ごす日常生活の中で、宗教や民族の違いを意識したことはほとんどなかった。そのためマレーシアについて学ぶ中でそれらの違いを非常に身近なものとして意識することができ、とても新鮮に感じた。さらにマレーシアの人々は、ひとりひとりが自分の属する民族や信仰する宗教だけではなく、他の宗教や民族についてもよく理解し、尊重しながらマレーシア人としての共通意識を持って共に生活していることが非常に印象的だった。マレーシアについての学習を通して文化や宗教、民族について知ることの大切さとそれらを相互に理解し尊重する姿勢を学ぶことが出来た。

さらに文化について印象に残っていることは、マレーシアの中にある日本文化である。マレーシアの首都であるクアラルンプールには、渋谷のスクランブル交差点をイメージした交差点があり、ショッピングモールの中には Tokyo Street という日本食や日本製品の店が立ち並ぶゾーンが存在することをバディーの現地学生に教えてもらい非常に驚いた。さら

にマレーシアには日本のコンビニエンスストアも存在すると聞き、日本のものが海外でも受け入れられ、親しまれていることに驚きとともに嬉しさも感じた。

バディとのディスカッション

農学部 1 年 佐倉田綺羅

スピーキングの授業では、バディとディスカッションをするという課題があった。授業内で扱ったトピックに関していくつか質問が挙げられ、それについてバディと意見交換をする様子を録画して提出するというものだ。1つ目は、映画「The Martian」の主人公のように火星で564日過ごすとしたらどうするか、2つ目は、映画「The Pursuit of Happiness」の登場人物たちの「幸せ」についての話だった。Malaysian studiesの授業やアクティビティでは、マレーシアと日本の文化や慣習について話題にすることが多かったため、それらと全く関係のない話題について、バディと話す貴重な機会だった。

特に1つ目の課題、火星での過ごし方についてのディスカッションが印象に残っている。私は普段から、友達とあれこれ想像を膨らませて話し合うことが好きで、自分とは異なる生活様式の中で暮らすマレーシアの学生が、どのような点に着目して何を想像するのかを楽しみにミーティングの時間を迎えた。しかし、いざ話してみると、地球からの救助を待つ時間の潰し方や火星の生き物について、私たちはほとんど同じようなことを考えていた。異なる文化の中で暮らしていても、文明のない火星に行ったら同じようなことをするのだろうと考えると、今までお互いの国での生活について、沢山紹介し合ったことが全てひっくり返されたような気持ちになり、とても滑稽に思えた。違いにばかり目が向いていた中で、変わった形ではあるが、マレーシアの学生との共通点を見つけられたことを嬉しく感じた。

異なる背景を持つ人と対話する際、目に見える違いではなく、普遍的なテーマについて意見を交わすことにより、考え方という無意識の部分における、違いと共通点を見つけることができる。また、それによって、話している相手、個人についてより深く知ることができるということを学んだ。

映画鑑賞

工学部 2 年 高藤実結

このプログラムの中で、私たちは 2 回映画を見る機会があった。1 回目は放課後のアクティビティでの「Once Upon a Time」、2 回目は授業の宿題としての「The Pursuit of Happiness」である。もちろん英語（または英語字幕）で、2 回とも映画を見た後にバディと意見交換をした。

これらが私の中で印象に残っている理由は 2 つあり、1 つは英語の映画を理解できるようになっていたことに驚いたためである。以前英語で映画を見たのは高校 1 年生くらいの時だったため、語学力はより身についているはずである。しかし、完璧にとはいかなくても、ストレスを感じることなく英語版の映画が楽しめるとは思っていなかった。2 回目の映画はプログラムの後半で、耳が英語に慣れてきていた、というところもあるかもしれない。

2 つ目の理由は、映画を見た後のバディとの意見交換で自身の成長を感じたためだ。これらの映画は、どちらも「幸せ」に対する価値観や、生き方といったところに訴えかけてくるものである。このような議題で話し合うと、日本人同士でも盛り上がり、様々な意見が飛び交う。英語で自分の意見を伝えるのはかなり難しかったが、この時が一番意見を伝えたい、と思った瞬間であり、相手の意見もしっかり理解したいと思った。このように強くコミュニケーションを取りたいと思っているときほど語学力は伸びるように思う。

この経験を通し、私は自身のステップアップを実感すると同時に、異文化交流を存分に楽しむことができた。また、参加者からは自分の価値観が変わった、という意見もあり、言語や国境の壁を越えて影響を与える映画を、改めて素晴らしいと感じた。

Traditional Fashion Show での異文化交流体験

工学部 1 年 本田理紗

プログラムで印象に残っていることの一つに、多民族国家であるマレーシアの人々との交流を通し、異文化・自文化理解を深めたことがある。マレーシアはマレー系、中華系、インド系、そして少数民族から構成されている。よって、宗教や結婚式、伝統衣装等、一つのトピックについて様々な民族の文化を一度に学ぶことができて大変興味深かった。アクテ

ィビティの時間に行われた Traditional fashion show では、マレーシアと日本の学生がそれぞれの伝統衣装を実際に身にまったり、写真や映像を用いたりしながら披露した。例えば、マレー系の学生が Baju Melayu や Baju Kurung を紹介し、日本の学生は浴衣や袴を紹介した。同じ種類の伝統衣装を着ている人もいたが、色やデザインが違ったり、別の観点や情報を提供したりし、終始楽しむことができた。マレーシアの文化について理解を深めることができたのはもちろん、準備や他の日本人の発表から、日本についても自分の知らなかった情報を知ることができた。そして、特にマレーシアの学生は感情を豊かに表現しており、誰もが自文化に誇りや愛を持っていることが伝わった。さらに、他者の発表についても発言や表情、チャット等で反応し、とても褒めていた。相手の文化に興味を持ってその素晴らしさを認め、互いにたたえ合う姿を見て、これが異文化尊重や共存の秘訣なのではないかと感じた。

授業やアクティビティを通じ、マレーシアや日本の人々の多様な個性や考え方、文化に触れることで知識を深め、視野を広げることができた。さらに、他者の鏡を通して自分を見つめ直し、とらえ直すことができ、非常に有意義な時間だった。

c. 研修体験・成果

マラヤ大学オンライン留学で成長した力

経済学部 3 年 東雅貴

3 週間に渡り行われたマラヤ大学オンライン研修において、私が成長したと感じる力を 3 つの観点から紹介する。

1 つ目は、英語力の向上である。英語 4 技能を鍛える授業と、マレーシア文化に関する授業を含めた合計 5 つの授業に加え、現地の学生バディが企画するアクティビティの数々、私の担当になってくれたバディとの個人的な交流を通じて、英語漬けの生活を 3 週間送ることができた。それにより、日を重ねるにつれ英語に対するハードルが段々と下がり、コミュニケーションのツールとして英語を使えているという実感が得られた。また 5 つの授業のそれぞれにおいては、特に TOEFL-IBT や IELTS で求められるような英語の 4 技能の実践的な力についての指導を受けた。例えばスピーキングにおいてはディベートで有用な各種の表現方法に関して学んだ。文法においてはネイティブでも間違えやすい 12 個の時制を習得した。ライティングでは、議論型エッセイや自由記述型エッセイといった異なるフレームワークを多種学んだ。大学院進学において海外の長期留学を計画しているため、このプログラムを通して得た英語力を継続して磨いていくことへのモチベーションも大いに高まった。

2 つ目は、異文化理解についてである。マレーシアスタディの授業やバディによるアクティビティを通して、マレーシア固有の文化構造や、その文化が成立するまでの歴史や宗教、思考性について学ぶことができた。マレーシアにはマレー系、中華系、インド系、その他の少数民族などの、数多くの人種・民族が暮らし、それに伴い様々な宗教を信仰している人が共存している。日本に住んでいる私から見れば非日常が広がっているわけだが、マレーシアでは、それぞれの人々が多様な文化構造について理解・尊重することが自然だという価値観を持っているということを学んだ。授業で異文化理解について習うのだが、それ以上に、彼らの一つ一つの言動から、他者に対する理解と尊重が当然のこととして行われているということを肌で実感できたというのが本音である。

最後の 3 つ目は、積極性である。プログラム参加前に立てた目標の一つとして、「参加しているどの学生よりも発言とリアクションをする」ことを決めていた。授業中の議論時間や、アクティビティでの雰囲気作り、バディとの映画鑑賞、全てに通じて誰よりも発言できたと自信をもって言える結果を残すことができた。もちろん発言内容に関しては、間違いを含ん

でいることや、稚拙なこともあったかもしれないが、発言せずに後悔するより発言して間違える方がいいと考え、積極的に授業やアクティビティに参加した。その一番のメリットは楽しいことである。現地の先生や生徒に名前を覚えてもらえて、この生徒はコミュニケーションをとる意欲があるということを皆の意識に根付かせることができたことで、話を振ってもらえることが多くなった。その結果、新たな会話が生まれるという好循環を自ら作り出すことができた。

今回のプログラムで私が大いに成長することができたのは、マラヤ大学の素晴らしい先生と、アクティビティのため多大な準備をしてくれた現地学生のバディのおかげである。今回学んだことを活かして、将来大きく羽ばたけるよう研鑽を続けていきたい。

プログラムで学んだ3つの力

経済学部1年 大須賀嘉美

今回のプログラムを通して私は異文化理解、言語能力、行動力の重要さと、それらの相互の関わりを学ぶことができた。これらは国際交流において不可欠で、それぞれが関係しあっているのだと実感した。以下では、3つの観点に関して今回の研修で体験したことや感じたことを書いていく。

まず、異文化理解に関する今回のプログラムでの経験についてである。私はこの研修への参加前マレーシアについてほとんど知らなかったが、この研修を通じてマレーシアの宗教や民族、文化などについて知ることができた。そして、マレーシアにはマレー系、中華系、インド系など多様な民族が異なる文化を持って生活しているが、対立することなく、それぞれを尊重して共存していると知ることができた。日本にいと、異文化への理解や尊重を実感をもって体験することは難しく、このプログラムに参加したことで異文化を理解し尊重すること、そしてその重要性を身をもって体験できた。これからさらにいろいろな文化に触れたいと思うようになった。

次に、言語能力についてである。この研修を通してやはりコミュニケーションの基礎となる言語能力は非常に重要だと感じた。参加前は英語で授業を受けたり発言したりすることに不安を感じていた。しかし、今回リーディングやスピーキング、ライティングなどの授業を受けて、自身の英語力が向上したと感じた。例えば、現地の学生や講師の話を理解したり、簡単にではあるが自身の意見を述べたりすることができるようになった。一方で、論理的に自身の考えや根拠を詳しく伝えることができなかったり、言葉が思いつかず伝えたいことを正確に伝えられなかったりと自身の言語能力の限界を感じることもあった。また、もっと

話せたらより面白かっただろうという場面もあった。言語はコミュニケーションの根幹であるため、その能力を高めることは重要だと実感した。今回のプログラムへの参加は、今後より一層言語の勉強に励もうというモチベーションの向上につながった。

最後に行動力についてである。上に述べてきたような異文化の尊重や言語能力ももちろん重要であるが、今回の研修を通して私が一番重要だと感じたことは行動力である。以前は英語で話すこと自体に自信がなかったが、今回のプログラムを通して少し自信を持つことができるようになった。また、自分から意見を言うことができるようになった。しかし、もっと自発的に発言したり意見を述べたりすべきだったとも感じている。英語が上手く話せるかどうかよりも勇気を出して発言できるかどうかの方が最も大事だと実感した。今後は自分から動けるようになりたいと思った。

このように異文化への理解、言語能力、行動力はそれぞれ重要であるが、今回の研修を通してこれらが相互に関係しているのだと理解することができた。言語能力がなければ行動を起こす自信を持てず、行動力がなければ国際交流イベントに参加して異なった文化を知ることができない。異文化への理解があれば、多くの言語を学びたいというモチベーションにもなる。今回の研修は異文化理解、言語能力、行動力が国際交流に不可欠であると同時にそれぞれが関わり合っているのだと学ぶことができた非常に有意義な機会であった。

3 週間の学びの成果

経済学部 1 年 岸田麻巳子

ここでは、今回のオンライン研修で私が学んだこと、考えたことを 3 つの点から述べる。

1 つ目は、英語力の向上についてである。授業、アクティビティ、バディとの交流を通じて長い時間英語に触れたことで、英語への反応速度が上がったという実感が得られた。先生からの質問に即座に反応する、バディからの連絡にすぐに返信する、という環境に身を置いたことで、3 週間という短い期間で、国内にいながら英語に対する意識が変えられるのだとわかった。また授業では、英語の 4 技能それぞれの力をどう伸ばしていくかという指導を受けた。例えばライティングの授業では、TOEFL で出題されるような議論型エッセイや記述型エッセイについて、どのようなパラグラフ構成で書くべきかを学ぶことができた。もちろん 3 週間でスラスラと書けるようになるわけではないが、今後どのようにライティングの力を鍛えていくかという道筋を立てるのに大きな助けとなり、継続して英語学習をすることのモチベーションも高まった。また、相手に理解してもらえらるまで英語で説明する粘り強さも身についた。私の発言内容がうまく伝わらなかったとき、今までなら妥協してしまっ

たかもしれないが、今回のプログラムでは言葉を変え身振り手振りを用いて必死で説明し、バディも一緒に言葉を探してくれたことで、最終的に理解してもらうことができた。伝えようという姿勢を見せることで、言葉が拙くても英語でのコミュニケーションを楽しむことができる実感した。

2つ目は、マレーシア文化の理解についてである。マレーシアスタディの授業やアクティビティを通して、マレーシアの文化やその背景にある歴史や宗教について学ぶことができた。私はマレーシア文化について説明する上で、「多様性」と「統一性」という2つの概念が重要だと考えた。「多様性」というのは、マレーシアにはマレー系、中華系、インド系などの民族が暮らし、様々な宗教を信仰しているが、それぞれが自民族の文化のみならず他の文化についてもよく理解し、尊重しているということである。一方で「統一性」というのは、マレーシアの人々が民族、宗教の違いを超えて、同じマレーシア人であるという意識を共有しているということである。例えばマレーシア独立記念日やマレーシア・デーには国民全員が盛大にお祝いをするという。このように、多民族国家であるマレーシアでは、それぞれの民族が平和に共存し豊かな文化を作り上げていると知ることができた。

3つ目は積極性についてである。プログラム参加前、私は目標の一つとして、「授業中にたくさん質問・発言すること」を挙げていた。しかし初週の授業では、発言したいという気持ちがありながらもミュートを外して声を発する勇気が出ない時があり、授業が終わってから後悔することも多かった。2週目からは、発言せずに後悔するより発言して間違える方がいいと考え直し、先生が意見を求めたときは必ず挙手するようにした。積極的に授業やアクティビティに参加することのメリットはたくさんあると感じた。まず、コメントや質問をしようという姿勢で相手の話を聞くことで、話の要点がつかみやすくなり、理解度が高まる。また発言回数が増えると先生や現地バディから早く名前を覚えられ、さらに話す機会が増えるため、プログラムをより有意義なものにできる。次に海外研修に参加する機会があれば、最初から意欲的にコミュニケーションをとっていきたいと思う。

今回のプログラムで私が積極的になることができたのは、フレンドリーな先生の方々と、サービス精神旺盛な現地バディのおかげである。学んだことを活かして英語学習を続けるとともに、国際共修ゼミやVSEプログラムなどに参加して国際交流の機会を増やしていきたい。

プログラムを通して得た成果

文学部 1 年 櫻井彬乃

今回のプログラムで得た成果について、言語運用能力、異文化交流、行動力の 3 つの視点から振り返る。

言語運用能力については、まずリスニング能力の向上が挙げられる。最初は話すスピードについていけなかったり、発音が聞き取りづらかったりして理解できないことが多かった。しかし授業と放課後のアクティビティを通して、1 日に計 4 時間から 6 時間程度英語を聞き続けたことで耳が徐々に英語に慣れてくるのを確かに感じる事が出来た。また英語は世界で第二言語としての話者人口が非常に大きいため、リスニング問題で聞く英語とは違った第二言語としての英語、日常生活の中で使われる生きた英語に囲まれた環境でリスニング力を鍛えられたことは、今後様々な国の人と英語でコミュニケーションを取るにあたって非常に良い経験になったと感じた。

また、スピーキング能力についても向上を感じた。プログラムに参加する前は、自分の伝えたいことをうまく話すことが出来ず、話すことに大きな苦手意識を感じていた。このプログラムは Speaking and Pronunciation の授業はもちろん、全ての授業や放課後のアクティビティで英語を話す機会が多くある。その中で良いコミュニケーションを取るためには自信がなくてもとにかく話して相手に伝えようとする事が大切だと学ぶことが出来た。他の人が使っていた表現を真似して使ってみたり、自分が持つ語彙の範囲内でわかりやすく伝えるためにはどう表現すれば良いかを考えたりして 3 週間を過ごし、プログラムの最後には、話すことに対する苦手意識が完全ではないものの以前よりも少なくなったと感じた。

リスニングやスピーキングの能力の向上は、より円滑なコミュニケーションに直接繋がるため、自身の能力の向上が英語を学ぶ喜びやモチベーションに大きく影響することを強く感じる事ができた。

次に異文化交流についてである。Malaysian Studies の授業や、放課後のアクティビティの中でマレーシアの民族、宗教、衣食住など様々な文化に触れ、その多様さを身近に意識しながら学ぶことが出来た。それと同時に多文化社会であるマレーシアの自分が持つ文化だけでなくそれ以外の文化についてもよく理解し、認め合いつつマレーシア人という 1 つの共通意識を持っているという異文化理解の姿勢を肌で感じる事が出来た。このような日本の生活だけでは感じる事がなかった感覚や経験を得ることができて非常に有意義であると感じた。

行動力については、以前よりも積極的に発言できるようになったことが挙げられる。このプログラムでは日本人学生 2 人に対し、現地の学生が 1 人バディとしてつき、一緒に授業の

課題をしたり、雑談や気軽に質問したりすることができる。それらの時間を使って少人数でたくさん英語を使ってコミュニケーションを取り、積極的にバディに質問するように心掛けた。それによって最初は自分が英語で発言することに自信が持てず、授業など大人数が参加する場面ではなかなか発言することが出来なかったが、段々と授業でも自分から発言することが以前よりもできるようになった。

言語運用能力、異文化交流、行動力の向上に加えてこのプログラムで得られることは、日本文化の再発見とさらなる行動のモチベーションである。Malaysian Studies の授業や放課後のアクティビティーでは、マレーシアについて学ぶだけでなく、日本人が日本の文化を紹介する機会も何度かあった。そこで他の人の発表を聞いて日本の文化についても新たなことを知ることができた。またモチベーションについては、私は海外への渡航経験がなく、今回のプログラムで初めて海外の人と密に関わるという経験をした。そのため今回マレーシアの美しい風景や人の優しさに触れ、より海外に行ってみたいという気持ちが強まった。さらに、英語をもっと勉強し、世界のたくさんの人と話してみたいというさらなる目標を見つけることができた。

このプログラムは 3 週間という短い期間ではあったが、このような多くの成果を得られる非常に有意義なものであった。

英語学習の意義と向き合い方

農学部 1 年 佐倉田綺羅

私がこのプログラムに参加して得られた成果は、英語のネイティブスピーカーではない自分が英語を学ぶことの意義を見つけられたことと、英語学習との向き合い方に変化があったことだ。

まず、英語を学ぶ意義について、近年では自動翻訳機能の精度の向上により、英語を学ぶ必要性を疑問視する議論もある。しかし私はこのプログラムに参加して 2 つの意義を理解することができた。1 つ目は、英語を使ってお互いの感情を正確に伝え合い、親睦を深めるためには、自分の耳で聞いて自分の言葉で話すことが必要だということである。3 週間、授業後のアクティビティーやバディとの LINE での会話など、学生との交流時間が十分に確保されており、英語でくだらない話をしたり冗談を言って楽しんだりすることの大切さを学んだ。同じ時間の感覚を共有するためには、自動翻訳機等の第三者を介することで生じるタイムラグが無い方がいいと感じた上、絶妙な感情の表現はやはり本人の口から出た言葉でなければ伝わらないと実感した。2 つ目は、世界共通の言語といえる英語の習得は、自国の

言語以外を話す人への歩み寄りを表すということだ。マラヤ大学の学生との会話では、お互いに異なる言語を持ちながら、共通項として英語を使っているという感覚があった。英語を学ぶという行為自体が、相手とコミュニケーションを取る手段を獲得して相手を理解したいという意思表示になると感じた。実際、マレーシアの多文化社会の中で英語は共通の言語として機能し、複数の文化の共生を実現させている側面がある。英語の学習は、異なる言語を話し、異なる背景を持つ者同士が理解し合うために、単にツールとしてではなく、精神的な意味でも必要なことである。

また、英語を学ぶこととの向き合い方について、特にスピーキングの学習に対して大きく意識が変わった。マレーシアは多民族国家であるため、マレー語をはじめとする複数の言語が使用されており、英語もそのうちの一つである。このプログラムは、現地の教授や学生も第一言語に英語以外を話す人々であるという点で、アメリカやイギリスへの語学留学と異なる。授業は英語の4技能それぞれの科目があった。4技能の中で自分が一番不得意だと感じていたのがスピーキングだ。相手の発言を受けて、文法や言葉選びに注意しながら即時に文章を構成しなければいけないためである。印象に残っているのが、プログラム1週目のSpeaking and pronunciationの授業での教授の話を聞いた時のことだ。「ネイティブのように話そうとする必要はない。あなたたちのやり方で伝えればよい。」その言葉で緊張や不安が和らいだ気がした。あくまで私たちはノンネイティブであり、目標とすべきは、ネイティブのように英語を使えるようになることではなく、未熟な英語の知識の中で様々な工夫をして意思疎通をする方法を身に付けることだ。ネイティブのような発音と流暢さを得ることがスピーキングの学習の最高到達点であるかのように感じていた私にとって、大きな転換点となった。世界規模で見ればネイティブでない人が大多数である。発音が日本語訛りで流暢でないからと言って恥ずかしがる必要はなく、自分の持っている手札を最大限に活用して意思を伝える練習が重要なのだと分かった。

私はこのプログラムを通して、一生の英語学習の核となるような気づきを得ることができた。これらの意識の変化をどのように行動に反映できるかが、今後の課題だ。効果的な勉強方法を模索しながら、将来、ヨーロッパへ留学をして農学に関する研究を学ぶという目標に向けて日々学習に取り組もうと思う。

研修による意識の変化

工学部 2 年 高藤実結

今回のプログラムは 3 週間という限られた時間の中で行われ、さらにオンライン上での研修であったが、たくさんの成長と変化を感じた。ここでは英語運用能力、行動力、そして私の意識の変化といった面から研修成果を述べる。

まずは英語運用能力についてだが、期待していた以上の成長はあったと思う。まず、自身の行動力が変化したことにより、より英語でのコミュニケーションを楽しむことができ、その結果スピーキング、ライティングの面では特に力が伸びた。普段英語を使っている人々と交流することで、私たちが中学や高校の英語では教わらない表現や、こういった単語をよく使うのか、相槌や話の始め方などを実際に聞きながら学ぶことができる。これは留学の最大のメリットといえるだろう。会話の中では聞き逃してしまうところも、LINE 上のやり取りでは文に残るため、このような表現をしっかりと頭に入れることができた。さらに、リーディング、スピーキングの授業では、英語圏でよく使われる表現や、日本語訳で同じような意味になる単語の使い分けを教わり、これらも私の英語運用能力の向上につながった。

留学プログラムに参加するにあたり、上記のような語学力について最も成長を感じられるだろうと思っていた。しかし、私にとってこのプログラムからの最大の恩恵は、行動力の面で気持ちが大きく変化したことである。以前は、自信のなさから英語でのコミュニケーションとなると全く自分から話せず、海外の大学で学ぶことなど不可能だろうと思っていた。しかし今では、英語で交流することに楽しさを見いだすだけでなく、大学生、もしくは大学院生のうちにオンラインではない留学プログラムに参加したいと考えている。これは私にとっても驚くべき変化であり、今後の人生に影響を及ぼした経験といっても過言ではない。

また、ここにはオンライン形式の利点があったのではないかと考えている。現地にいないことにより、毎日バディに連絡を取り、タイムスケジュールや授業の課題などを確認する必要があった。さらに、バディと話せる時間は限られていたため、短時間でたくさん交流しようとしてより積極的になった。実際、自分からアクションを起こして後悔することはなく、その後のコミュニケーションにもつながる。間違った表現を使ってしまうこともあるが、マラヤ大学の方々は何回でもチャンスを与えてくれたため、ミスをすることへの恐怖もかなり減った。このように、英語を使うことに対する抵抗がほとんど無くなったことは、私の中で最大の変化であった。今はコロナウイルスの影響により海外へ渡ることが難しい。しかし、ネットワークの発達により、オンライン上で異文化交流ができるような機会は自分次第でい

くから見つけることができる。異文化交流への抵抗が小さくなった今、そのような機会もたくさん作っていきたいと思っている。

最後にもう一つ、このプログラムを通して私の固定観念に対する意識が変わった。固定観念は捨てるべきものであるが、実際のところ何の先入観もなしに人と接することはかなり難しい。そのため、異文化交流の際には、同じ国の人と話すとき以上にお互いがお互いを知ることが大事だと思う。留学期間中にも、交流する時間が長くなるにつれて一人一人の性格が見えてきて、「マラヤ大学の生徒」ではなく一人の人として接することができるようになった。

このように、留学は語学力の向上だけでなく、内面的な力や価値観が変化するような経験となる。今後、機会があれば是非マレーシアに赴き、今回体感できなかったマレーシア文化を感じたいと思う。

三週間の学びと実践

工学部 1 年 本田理紗

マラヤ大学のプログラムを経て、言語運用能力、異文化理解力、行動力における成果と、この3つに関して得た考えについて述べる。

まず、言語運用能力である。このプログラムでは双方向のコミュニケーションの機会がとて多く、受信だけでなく発信する力も鍛えられた。知識を教わるだけでなく、授業内外の課題やディスカッションを通して知識を応用することで、実践的な英語を身に付けることができた。また、英語を母語としない人も多く、様々なアクセントの英語に触れることによって相手の発言を聞き取り、意図を汲み取る力を付けることができた。

次に、異文化理解である。主に Malaysian Studies やバディとのアクティビティの時間に文化について知識や理解を深めることができた。マレーシアは多民族国家であり、一度にマレー系、中華系、インド系、少数民族といった多様な文化を知ることができた。マレーシアの文化は一言で表すことができないものであり、その多様性も含めて一つのマレーシアなのだという誇りと団結を感じた。

続いて、行動力である。授業内では意見や感想、質問を求められる機会が非常に多く、行動力が試された。また、課題やアクティビティにグループで取り組むこともあり、他者との協力や交流の方法を学ぶことができた。行動力は言語運用能力にも異文化理解にも直結しており、全ての能力向上の根源であると感じた。行動を起こさなければ何も始まらないことを痛感し、積極的に活動することができた。

最後に、人と話す時と自分一人の時のそれぞれで大切だと考えたことを述べる。言語運用能力向上に加え、そこから可能となる異文化理解、そしてこれを実行する行動力にも深く関わるものである。

人と話す時は、文法や発音にとらわれたり恥じらいやためらいを感じたりせずに、思いつくまま積極的に発言をすることが大切である。これは、先生やバディからかけられた言葉でもあり、プログラムを通して実感したものでもある。実際の会話の場面では、読んだり聞いたりすると理解できる表現や驚くほど簡単な表現を使って、たとえ多少の間違いがあっても互いに意図を理解できることに改めて気付いた。発言によって自分のできることとできないことが明確になり、自信と向上心を持つことができた。

一方で、誰かと話した後や次に話す前等、自分一人の時には、上手く言えなかったことを振り返り、表現や単語の学習をする。この際、アウトプットを前提としたインプットを行うことが重要だった。つまり、実践のためには自分がその表現を使う場面を頭の中で想定しながら学ぶことが必要不可欠だと考えた。さらに、日頃から身の回りの様々なトピックに関心と意見を持つことも大切だ。授業で発言を求められるうち、アウトプットができない理由の一つに、アウトプットする内容を持てていないことがあると気付いた。それに加えて、素早く論理的に自分の意見をまとめる力も言語運用能力に大きく関わっていると考えた。

このように、「学びと実践」に関してプログラムを通して実感し、様々な場面で繰り返すことができた。英語の知識や技術を得ただけでなく、言語や異文化について理解や興味が深まり、さらにはそれらに関する考えを得ることができた。これからも向上心を持って学びと実践を継続していきたい。